



名曲の向こう側

第3回

スコットランドやアイルランドの民謡に、ベートーヴェンの編曲が残されているのをご存じですか？ 編成は歌（時にはデュエット）とピアノ・トリオ（ピアノ、ヴァイオリン、チェロ）で、Auld Lang Syne（蛍の光）やThe Last Rose of Summer（庭の千草）といった有名曲も、なかなかキャッチーな仕上がります。

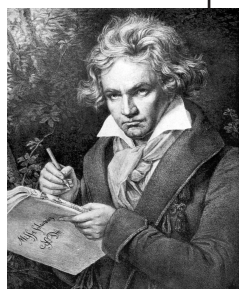
注文主は、イギリスの楽譜商人ジョージ・トムソン。各国で民謡への関心が高まる中、彼は、自ら収集した数々の民謡を、ブレイエル、ハイドン、ベートーヴェンなどの売っ子作曲家による優れた編曲で出版しようと思いました。19世紀初め、ナポレオン戦争による不況でパトロンからの年金が減っていたベートーヴェンにとっても、これは良い「お仕事」となり、ソナタなどの創作のかたわら、着々と海の向こうに編曲を納品していました。1809年から1820年にかけて、彼が手がけた民謡編曲は実に179曲を数えます。

このような編曲の仕事は、作曲家ベートーヴェンにとって、所詮アルバイト的な位置づけだったかもしれません。しかし、この仕事を通じた民謡・伝統音楽との出会いが、彼自身の創作活動にも影響を及ぼしました。たとえば、「のだめカンタービレ」で一躍人気曲の仲間入りを果たした第7交響曲（1811—12年）の終楽章も、同時期に編曲を手がけていたアイルランド民謡がルーツになっています。ベートーヴェン編曲による「12のアイルランド民謡集 WoO154」の第8曲に収められた Save Me from the Grave and Wise（まじめで分別くさいのはごめん）を聴いてみてください。これは、Nora Creinaというアイルランド民謡に新しい歌詞がつけられたものですが、民謡の動機を受け継いで挿入される間奏が、第7交響曲の終楽章の冒頭のテーマと瓜二つなのです。

第7交響曲の終楽章といえば、これでもかとアップビートが強調され、ワーグナーが「舞踏の聖化」と評したノリノリの音楽。この素朴さと執拗なリズムの快感は、アイリッシュ・トラッド（アイルランドの伝統音楽）のダンスミュージックに通ずるものがあります。たとえば、映画「タイタニック」でも使われた John Ryan's Polkaを聴いてみてください。フィドルやバグパイプの弾力あるサウンドが、ベートーヴェンの終楽章と重なってきませんか？

ベートーヴェン 交響曲 第7番

内藤 晃



ベートーヴェンが、アイリッシュ・トラッドのサウンドをどこまで知っていたかは分かりません。しかし、トムソンの採譜した民謡を編曲し、素朴で躍動する旋律に触れるうちに、その背後にある伝統音楽に無意識的に肉薄したとしても不思議ではありません。そんなベートーヴェンとアイルランドのただならぬ関係（？）に思いを馳せて、第7交響曲を味わってみてください。

参考文献＝藤本一子「ベートーヴェンの民謡編曲」
（国立音楽大学音楽研究所ベートーヴェン研究部門）

推薦盤：クラウディオ・アバド指揮ベルリン・フィルハーモニー [DG]
ライブ録音のほうの全集から。スマートで見通しの良い音楽づくり、熱気と躍動感が素晴らしい。

内藤 晃（ないとう・あきら）
ピアニスト・指揮者・作編曲家。
「もっと深い音楽体験」への道案内をライフワークとし、独自の切り口による講座やレクチャーコンサートが好評。オーケストラの弾き振りも行方。「おんがくしつトリオ」主宰。



（イラスト＝◎いとう まりこ）